

# 琉球に流入した漢詩文集と琉球漢詩文との関係について

——蔡大鼎の作品を中心に——

紺野 達也

## 一

琉球（中山國）は、十七世紀以後、薩摩藩の支配を受けると同時に、中國への進貢も繼續した。そのため、琉球の士族はしばしば日本において漢詩人や僧侶と詩文の交流を行うとともに、清朝の人士との間でも漢詩文の應酬が續けられた。さらに琉球國內でも漢籍を學習し、漢詩文が創作されていた。こういった琉球王國期に琉球の人々が作った漢詩文を『琉球漢詩文』と呼ぶ。現存する琉球漢詩文はほとんどが十七世紀以降のものである。したがって、そこからいわゆる十九世紀の「琉球處分」に至るまで、琉球漢詩文は少なくとも二百年以上の歴史を有したことになる。<sup>2)</sup>

琉球漢詩文を収めた書籍や関連資料は琉球處分以降、新たに設置された沖縄縣の外に徐々に流失した。そして第二次世界大戦のなかでも激烈を極めた沖縄戦の戦火で多くのものが失われ、その後の研

究は大きな困難に直面した。しかし、近年、各地で資料が再発見されるときにも、大規模な叢書や研究書・研究論文が陸續として刊行され、研究環境は大きく變化した。本稿では琉球最末期の漢文學者で、現存する作品数が琉球漢文學史上最も多い蔡大鼎（伊計親雲上）の漢詩文<sup>3)</sup>を中心に、その漢詩文と琉球に流入した漢籍との関係を検討したい。琉球の最末期に生きた蔡大鼎に着目するのは、その詩文が琉球漢詩文の歴史の蓄積を反映していると考えられるからである。

## 二

王國時代の琉球にはどのような漢詩文集があったのか。また當時の人々はどこからその書籍を入手したのか。まず、琉球に流入した漢詩文集の状況を概観する必要があるだろう。

現存する文献については、高津孝・榮野川敦編『増補琉球關係漢籍目録——近世琉球における漢籍の収集・流通・出版についての總

合的研究——<sup>(4)</sup>が唯一の網羅的な目録であり、そのなかから中國の詩文に關連する資料を以下に示したい。なお、この目録には琉球の人々の漢詩文集や彼らが冊封使や福州の人々の詩文を集めたもの、「琉球處分」以後に編纂や刊刻された書籍も含まれているが、ここでは言及しない。また同目録には近代の琉球學（沖繩學）の研究者らが収集した漢籍等も記録されているが、それらが琉球で傳えられていたものかどうかはわからないため、原則として扱わない（ただし、墨書などから琉球王國期のものであると判斷される場合は除く）。

A 尚家繼承古文書目録<sup>(5)</sup>

a 『古文眞寶大成俚諺鈔』（日本 毛利貞齋）一七〇七年刊

B 楚南家文書漢籍目録<sup>(6)</sup>

a 『唐詩紀』（明 黃德水・吳琯）刊本 殘本

b 『唐詩解』（明 唐汝詢）刊本 殘本

c 『古唐詩合解』（清 王堯衢）刊本 殘本

d 『尺牘合璧』（清 鄭文煥）寫本

C 宮良殿内文庫漢籍目録<sup>(7)</sup>

a 『註釋解學士千家詩講讀』<sup>(8)</sup>（明 湯顯祖）寫本

D 豐川家文書漢籍目録<sup>(9)</sup>

a 『魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集』（宋 黃堅）安政（一八五五—一八六〇）年間和刻本

b 『古文眞寶後集諺解大成』（日本 林羅山諺解 鵜飼石齋大

成）卷十九、二十缺

E 石垣市立八重山博物館所藏漢籍目録

a 『二十四孝詩選』寫本<sup>(10)</sup>（宮良用庸家文書）

b 『二十四孝詩選』寫本（宮城信勇家文書）

F 上江洲家文書漢籍目録<sup>(11)</sup>

a 『魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集』（宋 黃堅）和刻本

G 與世永家文書漢籍目録<sup>(12)</sup>

a 『古文眞寶大成俚諺鈔後集』（日本 毛利貞齋）

b 『古文眞寶俚諺鈔』（日本 毛利貞齋）殘本

H 東恩納寛惇文庫漢籍目録<sup>(13)</sup>

a 『三山同聲集』（清 王凱泰編）刊本 殘本

I 原忠順文庫漢籍目録<sup>(14)</sup>

a 『南豐先生元豐類藁』（宋 曾鞏）刊本 殘本

b 『一家言文集』（清・李漁）刊本 殘本

c 『六臣注』文選』（梁 蕭統撰、唐 李善等注）和刻本

d 『國朝註釋排律序時』（清 嚴永齡編）乾隆三十一年（一七六六）刊本

e 『郁郁齋古文析義詳解』（清 林雲銘評註、清 吳乘權附

註）道光二十九年（一八四九）刊本 殘本

f 『古文精玄詳註旁訓合選』（清 周大章・林雲銘同評定）

刊本 殘本

g 『本朝詠物詩選』（清 嚴永齡編）刊本 殘本

このように、琉球では主に唐詩を含む選集、そして『古文眞寶』（特に古文を収める『後集』）が広く重視されていたと言えるだろう。Iで古文の評註が多く残るのもそういった動きと関わっていると思われる。これらの選集は一部が中國から將來されたものであり、さらに和刻本や日本人が注を附したものである。

\*なお、この他にもいくつかの漢詩文集が琉球に流入していることが近年の研究によって確認されている。たとえば、山形縣米澤市の米澤市立圖書館には清の黃任撰・陳應魁注『香草齋詩注』が所藏され、これは琉球最末期の林世功舊藏本である<sup>(15)</sup>。

また早稻田大學圖書館藏清・喬煌『黃葉樓初集』は蔡大鼎が福州で光緒四年（一八七八）に購入したものである<sup>(16)</sup>。これらは彼等の清人の詩文への關心を窺わせるものであるが、琉球の士族に廣く見られる傾向であったかは今後の論を待ちたい。またこれらの書籍は琉球處分前後に入手されたもの（前述のH―aも同様か）であり、琉球の漢詩文創作全體への影響は大きくないであろう。

ついで、文獻上の記載を確認したい。明治四十三年（一九一〇）に開設された沖繩縣立沖繩圖書館では、大正十三年（一九二四）と昭和四年（一九二九）にそれぞれ『琉球史料目錄』が編纂された<sup>(17)</sup>。これらの目錄には琉球の人々による漢詩文集を著録するのみならず、次の漢籍に言及する（なおここに著録された書籍は残念なことに戦火によって焼失している）。

- a 『王夢樓詩集跋萃 琉球詠草』（清 王文治）
- b 『中山八景詠草』（清 徐葆光、琉球 程順則・蔡溫）
- c 『清人文集 曾文公手札』（清 曾國藩）（以下、すべて昭和四年版に著録）

- d 『師竹齋集』（清 李鼎元）
- e 『趙文楷詩集 付琉球紀事一百韻詩』（清 趙文楷）
- f 『長江集』（唐 賈島）

この二種類の『琉球史料目錄』はその性格上、琉球史料に偏重しており、著録する漢籍の大半は、王文治、徐葆光、趙文楷、李鼎元といった琉球國王を冊封するために來琉した冊封使あるいはその隨員の漢詩文集である。これらの漢籍はおそらく清琉の冊封体制の影響のもとで琉球に流入したものであろう。

一方、第二次世界大戦前に首里城北殿に置かれた沖繩縣教育會附設郷土博物館にも資料が保存され、そのなかに北京の國子監で琉球からの官生を教授した孫衣言の漢詩文を収めたと思われる「孫衣言漢文集」があったことが確認される<sup>(18)</sup>。

琉球の士族に關する家譜資料にも中國から流入した漢詩文集についての言及がある。王族にしばしば進講していた久米村士族の蔡文溥の家譜に

康熙四十年……九月十五日奉世子命進講『而菴說唐詩』<sup>(19)</sup>  
 十三年甲申八月因病告辭。

（康熙四十年（一七〇一）……九月十五日、世子の命を奉じて

『而菴說唐詩』を進講す。■<sup>マ</sup>四十二年甲申八月病に因りて辭を告ぐ。

という記載がある。家譜によれば、蔡文溥は康熙二十六年（一六八七）到北京の國子監に入り、同三十一年に歸國している。したがって、蔡文溥が進講した清・徐增『而菴說唐詩』はその折りに持ち歸つたものの可能性があるだろう。本書に對する、書梓行後、數十年風行海内、膾炙人口<sup>(20)</sup>の評價に従えば、このような家譜の記述は蔡文溥が清朝におけるいわば最新の文學的流行を書籍を通じて琉球に傳えたことを示していると言えよう。また康熙六十年（一七二一）には、やはり久米村士族の程順則が

在江南捐資購得『皇清詩選』<sup>(21)</sup>數十部、每部三十卷。歸獻王府內書院壹部、聖廟壹部、評定所壹部、餘分送師友。<sup>(22)</sup>

（江南に在りて資を捐て『皇清詩選』數十部を購得し、每部三十卷。歸りて王府内書院に壹部、聖廟に壹部、評定所に壹部を獻じ、餘分は師友に送る。）

と、江南、おそらくは蘇州もしくは杭州で清・孫鉉編『皇清詩選』を大量に購入したことが記録される。同様に久米村士族の鄭秉哲らも雍正二年（一七二四）到北京の國子監に入った際、『四書集註』・『四書直解』などともに『唐詩選』を各二部、『唐詩歸』・『古文折義全編』<sup>(24)</sup>を各一部給付されたことが記される。鄭秉哲ら二人が琉球にこれらの書物を持つて歸ったかはさらに今後の研究を待たねばならない。しかし、彼らがこれらの書物を受け取り、學んだことは當時

の琉球に一定の影響があつたように思われる。<sup>(25)</sup>

さらに琉球人の尺牘にも漢詩文集への言及がある。たとえば早稻田大學圖書館に所藏される蔡大鼎『續欽思堂集』の「寄候鄭虞臣夫子啓」其四（代作）には

辱蒙寄賜華翰、併用工圈點之『千家詩』。

（辱けなくも寄せて華翰を賜るを蒙り、工を圈點に用うるの『千家詩』を併す。）

とある。これは鄭虞臣<sup>(26)</sup>が圈點の附された『千家詩』を福州から琉球の士族に贈つたことを謝するものである。したがって、この『千家詩』は清國で刊行されたものであろう。

和刻本に關する資料も見てみたい。康熙四十七年（一七〇八）五月、首里士族である楊昌房は、

從尚敬公特賜『四書大和正解』一部（共三十冊）、『唐詩』一部（共六冊）、『四書頭書』一部（共十冊）。<sup>(27)</sup>

（尚敬公より特に『四書大和正解』一部（共三十冊）、『唐詩』一部（共六冊）、『四書頭書』一部（共十冊）を賜る。）

とある。ここでいう『唐詩』が何を指すかははっきりしないが、この時、楊昌房が下賜された『四書大和正解』が元祿十年（一六九七）刊『四書大全說約合參正解』（清・吳奎編）の和刻本（三雲義正が訓點を附したもので、冊數も現存するものと一致している）であることを踏まえれば、この『唐詩』も和刻本であると思われる。

乾隆二十九年（一七六四）の序文を持つ清の潘相『琉球入學見聞

録』卷二「書籍」に、

國王先後刊有『四書』・『五經』・『小學』・『近思錄集解便蒙詳說』・『古文眞寶』・『千家詩』、板藏王府、陳情即得。臣所見者有『四書』・『詩經』・『書經』・『近思錄』・『古文眞寶』白文小註之旁、皆有鈎挑旁記、本係鐫刻、非讀時用筆添註如「諸錄」所云。亦未見日本諸僭號也。<sup>(28)</sup>

(國王先後して刊するに『四書』・『五經』・『小學』・『近思錄集解便蒙詳說』・『古文眞寶』・『千家詩』有り、板は王府に藏し、陳情すれば即ち得たり。臣の見る所の者に『四書』・『詩經』・『書經』・『近思錄』・『古文眞寶』の白文小註の旁に、皆鈎挑旁記有る有り、本係れ鐫刻にして、讀む時に筆を用いて註を添うること「諸錄」の云う所の如きに非ず。亦た未だ日本の諸僭號を見ざるなり。)

とある。しかし、實際には「皆有鈎挑旁記」とは、これらの書籍が和刻本であることを示している。たとえば潘相がいう『近思錄集解便蒙詳說』は梁田勝信の撰であり、元祿八年(一六九五)に訓點を附して刊行されている。潘相は「板は王府に藏す」と記すものの、和刻本が琉球で廣く流通していたことが窺える。したがって、『古文眞寶』もその可能性があるのではないだろうか。

このように琉球に流入した漢詩文集に關する記録を概観すると、琉球を訪れた使節の漢詩文集を除けば、唐宋の詩文の詞華集が多いことが確認される。<sup>(30)</sup>

### 三

琉球の士族が漢詩文集を用いて唐宋の詩文を學んだ後、どのように新しい詩文を作ったのか。この問題を考えるために、まず蔡大鼎の『欽思堂詩文集』<sup>(31)</sup>卷三を確認したい。ここには五字を詩題とする八十五首の五言律詩(ただし連作を含むため、詩題は七十六題)が收められている。

これらの詩題について調査すると、次のように出典が明らかとなった(番號は筆者が便宜的に附したものである)。<sup>(32)</sup>

#### 一 好雨知時節

杜甫「春夜喜雨」

好雨知時節 好雨 時節を知り

當春乃發生 春に當りて 乃ち發生す

#### 二 過雨看松色

劉長卿「尋南溪常道士」

過雨看松色 雨を過ぎて 松色を看

隨山到水源 山に隨いて 水源に到る

#### 三 青山郭外斜

孟浩然「過故人莊」

綠樹村邊合 綠樹 村邊に合し

青山郭外斜 青山 郭外に斜めなり

四 落日滿秋山

王維「歸嵩山作」

荒城臨古渡 荒城 古渡に臨み

落日滿秋山 落日 秋山に滿つ

五 山遙不辨青

張少博「雪夜觀象闕待漏」

雪重猶垂白 雪重くして 猶お白を垂れ

山遙不辨青 山遙かにして 青を辨ぜず

六 輕烟拂流水

戴叔倫「送友人東歸」

輕煙拂流水 輕煙 流水を拂い

落日照行塵 落日 行塵を照らす

七 中天懸明月

杜甫「後出塞五首」其二

中天懸明月 中天 明月懸かり

令嚴夜寂寥 令嚴にして 夜寂寥

八 深夜月當花

李商隱「春宵自遣」

晚晴風過竹 晚晴 風は竹を過ぎ

深夜月當花 深夜 月は花に當る

九 秋至拭清砧

杜甫「擣衣」

亦知戍不返 亦た知る 戍りて返らざるを

秋至拭清砧 秋至りて 清砧を拭く

十 一葉下梧桐

崔曙「山下晚晴」

故林歸宿處 故林 歸宿する處

一葉下梧桐 一葉 梧桐より下る

十一 燈下草蟲鳴

王維「秋夜獨坐」

雨中山果落 雨中 山果落ち

燈下草蟲鳴 燈下 草蟲鳴く

十二 見雁思鄉信

岑參「巴南舟中夜書事」

見雁思鄉信 雁を見て 鄉信を思い

聞猿積淚痕 猿を聞きて 淚痕を積ぬ

十三 燕草如碧絲

李白「春思」

燕草如碧絲 燕草 碧絲の如く

秦桑低綠枝 秦桑 綠枝低る

十四 啼鳥驚殘夢

杜審言「賦得妾薄命」

啼鳥驚殘夢 啼鳥 殘夢を驚かし

飛花攪獨愁 飛花 獨愁を攪す

十五 春日輝桃李

黃庭堅「歲寒知松柏」

春日輝桃李 春日 桃李を輝かせ

蒼顏亦預觀 蒼顏 亦た觀るに預る

十六 春遲柳暗催

宋之問「奉和晦日幸昆明池應制」

節晦莫全落 節晦くして 莫全く落ち

春遲柳暗催 春遅くして 柳暗に催す

このように唐宋の詩一句をそのまま詩題とする作品は十六首のほり、全体の約六分の一（詩題に限れば五分の一以上）を占める。さらに『續欽思堂集』<sup>33</sup>にも「北斗挂城邊」という五言律詩があり、これも杜審言「蓬萊三殿侍宴奉敕詠終南山應制」をもとにしたものである。<sup>34</sup>

十七 北斗挂城邊

杜審言「蓬萊三殿侍宴奉敕詠終南山應制」

北斗挂城邊 北斗 城邊に挂り

南山倚殿前 南山 殿前に倚る

これらの出典となった十七首の唐宋の詩について、北宋の黃庭堅を除いた十六首を對象に前掲の『唐詩解』・『唐詩合解』・『而菴說唐詩』<sup>35</sup>での收録情況を確認したい（卷數は省略する）。

『唐詩解』二・三・四・七・九・十・十一・十二・十三・十四・

十六・十七

『唐詩合解』二・三・四・六・七・八・九・十・十一・十二・

十三・十四・十六・十七

『而菴說唐詩』四・六・九・十一・十六

このように出典となる作品は『唐詩解』と『唐詩合解』に集中している。さらに選集の卷數（『唐詩解』は五十卷、『唐詩合解』は十二卷）を考慮すれば、蔡大鼎は『唐詩合解』<sup>36</sup>を學習し、時にそこに收められる作品の一句を自らの作品とすることがあったと言えるだろう。

ただし、蔡大鼎の作品の内容については、その詩題の出典となつた唐宋の詩と必ずしも一致するわけではない。ではなぜ蔡大鼎はそれにもかかわらず、唐宋の詩句を自らの詩題としたのか。近世の琉球では官吏登用試験である「科」が實施されていた。特に對清外交文書の作成を擔う「文組役」を選抜する際には、五言六韻もしくは五言律詩を創作させ、詩題は唐詩から一句（七言あるいは五言）選んだものであった。<sup>37</sup>琉球の「科」に詩が課されることは清の孫衣言も二卷本『琉球詩課』（同治十二年（一八七三）刊）の序文において、予嘗聞、中山人士雖尚試律、然其國人所爲者、大率四韻而已。<sup>38</sup>

國人の爲る所の者は、大率四韻のみと。

と記しており、官吏の選抜において、いわゆる「試帖詩」が課される科目もあった。<sup>39</sup>蔡大鼎は道光三十年（一八五〇）春に「科」に及第しており、それは漢文組立役主取を選抜するものであったと判斷

される<sup>(40)</sup>。したがって、この八十五首は「科」で課される「試帖詩」の習作であると考えられる。

さらに琉球では首里の國學（一七九八年に創建）でも『唐詩合解』がテキストとして用いられた。蔡大鼎は久米村士族ではあるが、「詠國學綠槐二首」（『欽思堂詩文集』卷二）があるなど、國學とも一定の關係があり、その教材にも注意していたと思われる。

琉球に流入した漢詩文集と蔡大鼎の漢詩文の關係を考える上で、さらに「霸江泛舟文」（『欽思堂詩文集』卷二）を確認したい<sup>(41)</sup>。これは蔡大鼎が咸豐五年（一八五五）九月、「客」とともに現在の那霸市の國場川に舟を泛べて遊覽した時の文章である。以下、全文の原文を示しておく（訓讀は注<sup>(41)</sup>所掲の拙文で示している）。

乙卯之秋、九月既望、予慕蘇子之風、乃偕客泛扁舟於霸江之畔。清風徐拂、水波不興、遂放棹於高江洲村河源。其源曲折繁廻、似窮不窮、指顧之間、恍入武陵勝境。夾岸有丹楓千樹、蘆花半洲。紅影使醉顏增色、白花共明月爭輝。更見鳶飛魚躍、覺化育流行、無非天幾之鼓盪也。少焉月出於東山之上、潮亦既退、予乃返棹、絲竹並舉、共誦明月之詩、迭歌赤壁之賦。回望大河、只見月色水光、與天宇合而爲潔。且水清見底、月印水中、雖赤壁之遊、桃源之勝、不是過也。古詩有云「萬里長江飄玉帶、一輪明月湧金毬」是已。既而縱一葦之所行、泊舟奧山後浦、客謂予曰、「此山果金山寺之佳勝也」。予因名小金山寺。又靠落平泉、客又曰、「此泉略類廬山瀑布」。予亦名以小廬山。其源遠流長、

混混不舍晝夜、而吐激鏡中、能清客耳。一掬飲之、頓洗俗情無盡。斯遊也、予因入貢天朝之文章、述作告成、偶泛舟遊觀、飽覽山川之勝。時人「將謂偷閒學少年」、則又非知予者已。

「既望、予は蘇子の風を慕い、乃ち客と偕に扁舟を霸江の畔に泛ぶ。清風徐るに拂い、水波興らず」「少くして月は東山の上に出で」「共に明月の詩を誦し、迭いに赤壁の賦を歌う」「一葦の如く所を縦いままにして」という表現からわかるように、蔡大鼎は明確に北宋・蘇軾「前赤壁の賦」を讀んでいる<sup>(42)</sup>。前述したように、琉球には和刻本もしくは日本人が注を附した『古文眞寶』、特に後集が流入していた。したがって、琉球ではそれを利用して古文が學ばれていたと考えるのが自然であろう。久米村士族として對清外交を擔當していた蔡大鼎も同様に『古文眞寶』を和刻本等で學習していたのではないだろうか。

この「霸江泛舟文」において、蔡大鼎はさらに二首の詩を引用する。そのうち、「萬里の長江玉帶飄り、一輪の明月金毬湧く」は「古詩」とあるものの、作者ははっきりしない。一方、末尾の「將謂偷閒學少年」は北宋・程顥の七言絶句「春日」偶成<sup>(43)</sup>の結句である。この詩は『性理大全』<sup>(44)</sup>卷三十九、卷五十六、卷七十に引用され、『千家詩』にも見られる。蔡大鼎は儒教（朱子學）と詩歌の學習過程でこの兩種の漢籍からこの程顥の詩を知ったものだと考えられる<sup>(45)</sup>。

## 四

本稿は琉球の士族の詩文創作の一端、具體的には琉球最末期の漢文學者である蔡大鼎がどのように唐宋詩文を學んで詩文を作ったのかについて、琉球に流入した漢詩文集の流入の情況をもとに考察した。その結果、『唐詩合解』と和刻本等による『古文眞寶後集』が有力な來源の一部であることが明らかとなった。これは、ほぼ一千八百五十篇にのぼる蔡大鼎の詩文を考える上で重要であるとともに、『域外漢籍』と東アジアの漢詩文の關係についての貴重な事例であると言えるだろう。

琉球の士族は琉球國內での學習、そして福州や北京についての讀書において、中國語、中國の歴史や思想、地理とともに詩文の知識を得ていた。これらの知識の獲得、そして詩文の創作は個人の關心によるだけでなく、外交上の必要（これは對清外交だけでなく、清朝における朝鮮やベトナムとの交流や日本との往來においても缺くことはできなかった）もあったことに誤りはなからう。ただし、琉球はもともと他の東アジアの國家・地域よりも國力が小さく、流入した漢詩文集の數も多くなかった上、沖縄縣内、特に沖縄本島にあった資料が戦火によって失われ、縣外に流失した資料も世界各地に分散している。そのような情況にあつて、僅かに残った資料と例外的に大量に傳わっている蔡大鼎の作品を結びつけることで、琉球

における漢詩文創作の様相も明確にすることができらるだろう。本研究がその一助となることを願う。

\* 本稿は二〇一三年に「對於『文本・詮證・傳播』——中國典籍與東亞文化交流學術研討會」で口頭發表したものを、加筆、修正したものである。

\* 本稿はJSES 科研費JP 21K12973の助成を受けたものです。

## 注

- (1) これらの問題についても、關連の研究が進展している。特に水上雅晴氏の一連の研究は現存の漢籍をもとに當時の學習情況、特に字訓、字義や訓點を詳細に考察しており、極めて重要である。水上雅晴「琉球王國と漢籍——書き入れから見た學習狀況」(琉球大學編『知の源泉』やわらかい南の學と思想5)(沖縄タイムス社、二〇一三年三月初版)五二―六五頁、同「琉球地方士人漢籍學習の實態——書き入れに着目した考察」(琉球大學教育學部『琉球大學教育學部紀要』第八四集、二〇一四年二月)一一―二頁、同「琉球中央士族の漢籍學習について——楚南家本を中心とする初步的考察——」(法政大學沖縄文化研究所『沖縄文化研究』第四七號、二〇一五年三月)四一―五三頁などを参照。

- (2) 「琉球處分」後、琉球の舊士族層、特に久米村士族には詩に巧みなものがあり、彼等は琉球漢詩の傳統を繼承したと言えるだろう。しかし、琉球王國の滅亡後の彼等の社會的地位は言うまでもなく、過去とは完全に異なるため、本文では言及しない。

- (3) 蔡大鼎が琉球國內などで歌った約千二百首の作品が近年發見され、その研究環境は大きく變化した。拙稿「蔡大鼎の漢詩文集の諸本について——琉球末期の漢詩文集の刊行を中心に——」(古典研究會『汲古』第六一號、二〇一二年六月)五三―五九頁を参照。

(4) 二〇〇五年三月發行。

(5) 琉球王國の王家である尚家が所有していた「琉球國王尚家關係資料」は國寶に指定され、那覇市歴史博物館に收められている。

(6) 楚南家は久米村（唐營）の士族。この楚南家文書は魏掌政が所有していたものであり、現在は法政大學沖繩文化研究所に所藏される。高津孝「楚南家文書 解説」（法政大學沖繩文化研究所編『法政大學沖繩文化研究所藏 琉球關係史料目録』（法政大學沖繩文化研究所、二〇一三年三月發行）七九—九一頁を参照。なお『法政大學沖繩文化研究所藏 琉球關係史料目録』は「38 唐詩解」（表紙・裏表紙のみ残存）・「39 唐詩解」（卷十六・王維「老將行」殘葉のみ）も著録する。

(7) 宮良殿内は石垣島の宮良家の尊稱である。宮良殿内文庫は現在、琉球大學附屬圖書館に置かれる。

(8) 本書は光緒十六年（一八九〇）に鈔寫されたものであり、本稿の基準より後の時期のものであるが、原本はおそらく琉球國內に傳えられたものであるため、ここに記録する。なお、その原本は確認されない。

(9) 豊川家は石垣島の士族。豊川家文書は石垣市役所に保管されている。

(10) 光緒五年（一八七九）以前の寫本か。

(11) 上江洲家は久米島の士族。その漢籍等は現在、久米島博物館所藏。

(12) 與世永家も久米島の士族。その漢籍等は現在、久米島博物館所藏。

(13) 東恩納寛惇文庫は現在、沖繩縣立圖書館に置かれる。

(14) 原忠順文庫は現在、琉球大學附屬圖書館に置かれる。

(15) うるま市立圖書館市史編さん係『うるま漢詩ロード散策No.1』（うるま市立圖書館市史編さん係發行）、榮野川敦・勝連晶子「戦前に流出した琉球・沖繩關係資料について」（うるま市立圖書館市史編さん係編『蔡大鼎『伊計村遊草』等調査研究事業研究成果報告書』（うるま市教育委員會、二〇一五年三月發行）一〇九—一二二頁。

(16) 注(15)「戦前に流出した琉球・沖繩關係資料について」一一三・一一四頁。

(17) 法政大學沖繩文化研究所編『沖繩縣立沖繩圖書館郷土史料目録』（法政大學沖繩文化研究所、一九八二年三月發行）による。

(18) 園原謙「沖繩縣教育會附設郷土博物館について」（沖繩縣立博物館「沖繩縣立博物館紀要」第二八號、二〇〇二年三月）、二四頁。なお同頁には「俞曲園先生」が記録され、「藩政時代の習字手本」と記されている。この俞曲園先生は清・俞樾を指すが、實際にどのようなものであったかは未詳。

(19) 『蔡氏家譜（七世蔡朝用）』（那覇市企劃部市史編輯室編『那覇市史・資料編 第一卷 六家譜資料二（上）』（那覇市企劃部市史編輯室、一九八〇年三月發行）三〇四頁「十一世諱文溥祝嶺親方」。

(20) 蔣寅「徐增對金聖嘆詩學繼承和修正」（北京師範大學『北京師範大學學報（哲學社會科學版）』二〇〇六年第四期、二〇〇六年七月）九一頁。蔣寅氏はこの『而菴說唐詩』の成書時期を康熙二年（一六六三）九月とする。なお『而菴說唐詩』（四庫全書存目叢書（齊魯書社）第三九六冊所收本）には康熙元年の自序がある。

(21) この選集も琉球の詩を採録する。上里賢一編『校註本中山詩文集』（九州大學出版會、一九九八年四月初版）「解説」一五—一八頁を参照。

(22) 『程氏家譜（六世程泰祚）』（那覇市企劃部市史編輯室編『那覇市史・資料編 第一卷 六家譜資料二（下）』（那覇市企劃部市史編輯室、一九八〇年三月發行）五四九頁「七世諱順則」。上里賢一「琉球への漢籍の傳播と受容」（上里賢一『東アジア漢字文化圏の中における琉球漢詩文の位置』（二〇〇七年三月）三頁はすでにこのことに言及する。

(23) 「折」は「析」の誤りだろう。

(24) 『鄭氏家譜（十三世鄭秉哲）』（注(22)『那覇市史・資料編 第一卷 六家譜資料二（下）』六二〇頁「十三世諱秉哲」。

(25) 前述のように孫衣言も北京の國子監で琉球官生の教育を擔當しており、官生の東國興（道光二十年（一八四〇）入監）に漢籍の學習を指示している。そのなかには「古詩紀」・「八代詩乘」・「古詩取」・「全唐詩鈔」・「李白詩」・「王摩詰詩」・「杜甫詩」・「韓詩」・「李義山詩」・「白香山詩」・「蘇詩」・

『宋詩鈔』・『元詩選』・『金詩選』・『明詩綜』・『列朝詩選』・『百三名家集』・『文紀』・『朱子文集』・『儲同人十家文鈔』・『唐宋文醇』・『茅鹿門八家文抄』・『李義山樊南用甲乙集』・『章藻切思綺堂集』・『宋四六』・『琴西日唐四傑爲正宗』といった漢詩文集あるいはそうではないかと推測される書籍が含まれている。眞境名安興『沖繩教育史要』(沖繩書籍販賣社、一九六五年九月初版。初出は一九三一年。琉球新報社編『眞境名安興全集 第二卷』(琉球新報社、一九九三年二月第一版)にも収録)一五九—一六〇頁。ただし、これらの書籍が全て琉球に入ったか否かについては、明確な記載が見られない。

(26) 鄭虞臣については、拙稿「蔡大鼎の基礎的研究のための覚書——家族と生涯を中心に——」(注15)『蔡大鼎「伊計村遊草」等調査研究事業研究 成果報告書』三四・四九頁。

(27) 『楊氏家譜(長堂家)』那霸市企劃部市史編輯室編『那霸市史・資料 編 第一卷 七 家譜資料三(首里系)』(那霸市企劃部市史編輯室、一九八二年一月發行)八七一頁「七世昌房」。

(28) 黃潤華・薛英編『國家圖書館藏琉球資料匯編』(北京圖書館出版社、二〇〇一年一〇月第一版)下冊所收。注(22)「琉球への漢籍の傳播と受容」五一六頁も参照。

(29) 當時の琉球士族の漢文(文言文)の學習には「音讀法」と「漢文訓讀法」があった。久米村士族を中心に、對清外交を擔う人々は漢語(官話)を學んでいることもあり、「音讀法」が用いられた。しかし、いづれにせよ漢語は學習によって學ぶものであり、いわば琉球の人々にとって漢語は完全にいわれる「第二言語」であったと思われる。したがって、琉球でも廣く「漢文訓讀法」が採用され、和刻本も用いられたのであろう。

(30) 文化三年(一八〇六)に慶賀使の一員として江戸を訪れた鄭嘉訓に幕臣の成島司直が面會し、その記録が『琉球録話』として遺され、國立公文書館内閣文庫に寫本が所藏される。同書の「書畫法帖」に「宋元印本及古名書畫、王府頗富、民間無流傳者」とある。これについて、高津孝「琉球、

薩摩の書道交流」(高津孝『博物學と書物の東アジア——薩摩・琉球と海城交流——』(榕樹書林、二〇一〇年八月發行。初出は一九九八年)二一四頁は「宋元印本」を「宋版や元版の書籍」と解している。確かに、「印本」とは通常、刊本のことを指すが、當時の中國であっても稀覯本である宋版や元版が琉球に、それも大量にあったのかは疑問が残る。章題名が「書畫法帖」であることから、ここは宋元の書畫を寫して刊刻したものではないだろうか。あるいは鄭嘉訓の誇張表現かもしれない。今後の研究を待ちたい。

(31) 以下、『欽思堂詩文集』は、うるま市立圖書館市史編さん委員會編『蔡大鼎關連資料集 一』(うるま市教育委員會、二〇一四年三月發行)所收慶應義塾圖書館藏本のカラー影印による。また高津孝・陳捷主編『琉球王國漢文獻集成』(復旦大學出版社、二〇一三年七月第一版)第二七冊にも同本のモノクロの影印が收録される。

(32) 唐宋の詩歌について、ここでは便宜的に『全唐詩』(中華書局排印本、一九六〇年四月第一版)および北京大學古文獻研究所編『全宋詩』(北京大學出版社)から引用した。

(33) 以下、『續欽思堂集』はうるま市立圖書館市史編さん委員會編『蔡大鼎關連資料集 六』(うるま市教育委員會、二〇一五年三月發行)所收早稻田大學圖書館藏本のカラー影印による。また注31「琉球王國漢文獻集成」第二九冊にも同本のモノクロの影印が收録される。

(34) 嚴明『近世東亞漢詩流變』(鳳凰出版社、二〇一八年九月第一版)下冊「琉球漢詩流變史略」一六八頁はこの『欽思堂詩文集』卷三の「試帖詩題目皆出自唐宋詩」というが、筆者の調査では全ての詩の詩題が唐宋の詩に基づいているわけではない。

(35) 『唐詩解』と『而菴說唐詩』はいずれも『四庫全書存目叢書』(齊魯書社)所收本をもとに調査した。『唐詩合解』は光緒十八年(一八九二)刊『古唐詩合解』(早稻田大學圖書館藏)による。『唐詩紀』は收録範圍が盛唐までのため、調査對象から除外した。

(36) この他、『欽思堂詩文集』巻二に五言絶句「舉盞邀明月」三首があり、この詩題は李白「月下獨酌」其一によるものだろう。『續欽思堂集』には七言絶句「晚晴風過竹」二首、「明月松間照」三首、「落葉無行路」三首があり、その詩題は李商隱「春宵自遣」、王維「山居秋暝」、陸游「樵父」によると考えられる。このうち、唐詩の二首は「唐詩合解」に収められている。

(37) 注(25)『沖縄教育史要』一六六頁を参照。ただし、試験の内容には變動があった。

(38) 注(28)『國家圖書館藏琉球資料匯編』下冊所收。また注(31)『琉球王國漢文獻集成』第三二冊(早稻田大學圖書館藏本影印)も收録する。

(39) 高津孝「琉球詩課と試帖詩」(鹿児島大學法文學部史學地理學考古民俗學教室『鹿大史學』第四三集、一九九六年一月)一一三頁は二卷本『琉球詩課』の孫衣言の序も引用しつつ、琉球の「科」は乾隆二十五年(一七六〇)頃から始まり、乾隆・嘉慶年間に試帖詩が採用されたが、琉球の試帖詩は全て四韻の律詩だったという。

(40) 拙稿「蔡大鼎の漢詩文における「科」と「科舉」」(朱徳蘭・林育生主編『海邦養秀 第18届中琉歴史關係國際學術會議論文集』(中琉文化經濟協會、二〇二三年九月初版)一五五・一五六頁を参照。蔡大鼎には「考試及第志喜有引併詩」(『欽思堂詩文集』卷一)があり、「辛庚戌(筆者注、道光三十年)春、入場應試、即試之後、獨占鰲頭」とある。

(41) 拙稿「開かれつつある琉球漢文學の新たな世界——蔡大鼎の作品を中心に」(注(1))『知の源泉——やわらかい南の學と思想5』(72・73頁)。

(42) 注(41)七三頁。蔡大鼎には他に五言絶句「東坡遊赤壁圖」(『欽思堂詩文集』卷三)があり、「兩賦傳千古、教予意悵如。九原今可作、果必舉藍輿」と歌い、「後赤壁賦」についての知識もあったことが窺える。

(43) 注(41)所掲書の訓讀を訂正した。

(44) 前述した鄭秉哲は北京の國子監に入った際、『性理大全』も受領している。注(24)『鄭氏家譜(十三世鄭秉哲)』六二〇頁「十三世諱秉哲」を参照。

また蔡溫『要務彙編』(國立公文書館内閣文庫に刊本が所藏される)にも『性理大全』がしばしば引用されている。都築晶子「蔡溫の儒家思想について——『要務彙編』をめぐる——」(龍谷學會『龍谷大學論集』第四四五號、一九九五年二月)二九六―二九九・三〇五・三〇六頁、糸數兼治『要務彙編訓注』(私家版、二〇二二年三月發行)を参照。

(45) ただし、この一句は蔡溫『要務彙編』に確認されないことから、『千家詩』の讀書・學習の影響が大きいと思われる。